

テーマ	キーワード	キーワードの概要	語り部		中心人物	周辺人物
			通史	テーマ		
国家の源流	推古朝の政治 ＜黎明期＞	592年に推古天皇が即位。聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握る。太子と馬子の連立政権の状況の中で、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化や政治制度の導入をはかり、官僚制度の確立や歴史書の編纂などを行って、中央集権国家としての体裁を整えていった。	太安万侶	藤原不比等	推古天皇	聖徳太子 裴世清〔隋〕 小野妹子
	大化の改新 〔乙巳の変～天智朝〕 ＜準備期＞	聖徳太子・蘇我馬子・推古天皇の死後、蘇我麁鹿・入鹿の専横が目につく様相を呈していた。皇室に主導権を取り戻し、天皇を中心とした国家体制の樹立を画策した中大兄皇子・中臣鎌足らは645年、飛鳥板蓋宮において、皇極天皇の目前で蘇我入鹿を殺害し、さらに蘇我氏を攻撃して蘇我氏を自滅に追い込む〔乙巳の変〕。年号を「大化」と定め、難波宮に遷って、孝徳天皇、皇太子・中大兄、内臣・中臣鎌足を中心に政治改革に取り組んだという〔大化の改新〕。のち、飛鳥に戻り、斉明期には盛んに土木工事と外征を行う。663年、朝鮮半島、白江の戦いに敗れると、内政強化に方針転換し、668年、中大兄は近江大津宮で即位して天智天皇となり、近江令を制定したという。			天智天皇 〔中大兄皇子〕	中臣鎌足 蘇我入鹿 有間皇子
	壬申の乱 ＜具現化への障害を払拭＞	671年、天智天皇が死去し、翌年、大友皇子の近江朝廷側と吉野に隠棲していた大海人皇子とが皇位をめぐって戦い、大海人側が勝利した。大友を支持した旧来の大豪族が一掃され、皇室の権威が突出した存在へと変化した、天皇が神格化されることとなった。			天武天皇 〔大海人皇子〕	大友皇子 大伴吹負 大分稚臣 〔大分県〕
	飛鳥京の時代 〔天武・持統朝〕 ＜具現期＞	壬申の乱に勝利した大海人皇子は672年、飛鳥浄御原宮で即位し天武天皇となった。皇族を重用して皇親政治を展開、「八色の姓」という新しい身分秩序を制定する。また、「飛鳥浄御原令」の制定や国史の編纂にも着手し、律令国家としての体裁を整えていく。続く持統天皇は、「飛鳥浄御原令」を施行し、「庚寅年籍」という戸籍をもとに班田制を実施するなど、律令政治を具体的に開始する。飛鳥が京（みやこ／首都）としての役割を担い始める時代とも言える。			持統天皇	高市皇子 草壁皇子 大津皇子
	藤原京の時代 ＜完成期＞	持統天皇は、唐の都・長安の都城制にならい、畝傍・耳成・天香久山の和と三山に囲まれた地に、藤原京を造宮。694年に遷都し、701年には「大宝律令」が制定される。中国を手本とした律令国家体制づくりは、藤原京造宮をもって完成期を迎えた。			藤原不比等	持統天皇 文武天皇 柿本人麻呂
	カミの崇拜	カミ（自然や先祖）の崇拜による祈願祈念とその結果が政や生活の指針になっていた。				
仏教の伝来と興隆	崇仏論争	552年、百濟聖明王からの「仏教公伝」を受けて、仏教信仰推進派の蘇我稲目と仏教排除派の物部尾輿が対立。敏達天皇・用明天皇の相次ぐ病死で排除派の物部氏が優勢となったが、次期天皇擁立をめぐる政争から蘇我馬子・厩戸皇子が物部守屋を討ち、崇仏派の蘇我氏が主導権を握るようになった。	道昭		蘇我稲目	聖明王〔百濟〕 物部尾輿 三輪 逆
	仏教興隆策	592年に推古天皇が即位。聖徳太子が摂政、蘇我馬子が大臣として政治の主導権を握る。飛鳥寺や法隆寺など各地に寺院を建立したり、朝鮮半島から僧を招いたり、役人に仏教信仰を奨励したり、と仏教興隆を国策として推進していった。			聖徳太子 〔厩戸皇子〕	推古天皇 蘇我馬子 玄奘〔唐〕
	古墳の終末	646年の薄葬令や仏教伝来に伴う死生観変化、寺院建設の流行などにより、権力の象徴であった古墳築造が衰退していった。				
	陰陽五行と古代の思想	古代からの相宅や相墓といった占いの技術が郭璞五行説に基づきつつ総合されて成立した。天文学、易学、暦学、地理学なども広く包摂され、高松塚古墳やキトラ古墳の「四神図」や「天文図」、飛鳥池工房遺跡から大量に出土した「富本銭」に見られる「七曜」などもこれに関連したものと見られる。				
東アジア文化の受容と変容	大陸の先進技術	遣隋使・遣唐使の派遣や朝鮮半島情勢の変化による渡来人の大量移住などによって、文化や思想とともに、建築、造園、木・石・金属などへの彫刻、陶芸、鑄造など新しい技術が伝わったと考えられる。日本古来の様式は、これら技術の影響により、変容を受けたり、日本独自の発展を遂げることとなる。	南淵請安		南淵請安	皇極天皇 高向玄理 僧旻〔百濟〕
	漢字と万葉仮名	漢字で日本語を表記した例は、5世紀後半の稲荷山古墳出土の鉄剣銘や6世紀初頭の隅田八幡神社人物画像鏡銘などに見られ、渡来系氏族が文筆の仕事に従事していたと考えられている。官僚制度を整えていく段階で、漢字の教養が上層階級に広がり、日本語を漢字を利用して表記する「万葉仮名」へと発展していったと考えられる。また、それに付随して紙や墨の製法も本格的に伝来した。			観勒〔百濟〕	聖徳太子 惠慈〔高句麗〕
					柿 本 人 麻 呂	曇徴〔高句麗〕 稗田阿礼 太 安 万 侶

(2)飛鳥時代の関係人物

※現時点では、キーワードに対応するストーリーにその人物が必ずしも登場してはいない。		
人 物 名	キーワード	解 説
推古天皇	仏教興隆策 推古朝の政治	第33代天皇(在位593年1月－628年4月)。敏達天皇妃。崇峻天皇が蘇我馬子に暗殺(592)されたあと、豊浦宮で即位した。わが国最初の女帝。602年小墾田宮を造営してここに移転、亡くなるまでを小墾田宮で過ごした。
蘇我馬子	カミの崇拝、崇仏論争 推古朝の政治	稲目の子。渡来系の司馬氏と協力して崇仏運動を推進。 大臣(おおおみ)として、推古朝期には聖徳太子との連立政権的役割を果たした。
聖徳太子 (厩戸皇子)	カミの崇拝、崇仏論争 仏教興隆策 推古朝の政治 漢字と万葉仮名	用明天皇の子。橘羅宮(のち橘寺)で生まれる。蘇我馬子と物部守屋の戦いの際、馬子側に参戦し、勝利に貢献したという。 593年、推古天皇の摂政に就任。604年「十七条憲法」を作成し、役人に仏教信仰を奨励する。615年頃、仏教經典の注釈書である「三経義疏」を著す。 推古天皇の摂政として中央集権体制樹立に向けての諸施策を行う。冠位十二階制、十七条憲法を制定し官僚機構を整えた。遣隋使の派遣の際、小野妹子に持たせた国書には対等外交の姿勢が見られる。また、中国の王朝につらいう「天皇記」「国記」など歴史書の編纂も行なったという。 「十七条憲法」の中で仏教信仰を奨励したのは、經典研究を通じて役人階層に「文字文化」を定着させようという意図があったとの説がある。漢字の音を借りて、日本語を表記する「万葉仮名」の発展につながったと考えられる。
裴世清 〔隋〕	推古朝の政治	隋の煬帝が、第2回遣隋使の咨礼使として608年に倭国へ派遣した。6月15日難波津に泊まった。翌年には倭国返書を持ち帰国。この際、小野妹子、高向玄理、南淵請安、皇が再度遣唐された。
小野妹子	推古朝の政治	推古15年(607)に隋に派遣される。「日出処の天子」…と書いた国書を煬帝に提示し煬帝の怒りを買う。しかし翌年、遣使・裴世清が来日。
天智天皇 (中大兄皇子)	大化の改新	舒明天皇・皇極天皇の子。皇極4年(645)、中臣鎌足らと謀り、クーデターを起こして蘇我入麿を殺害し、叔父・孝徳天皇を即位させ、自身は皇太子となった。そして大化という元号を制定し、様々な改革を行った。 661年、百濟救援活動中に舒明天皇が崩御したが、その後、長い間皇位に即かず称制を行う。663年、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫した後、667年近江大津へ遷都して、翌年即位した(天智天皇)。第38代天皇(661年8月－称制、在位668年2月－672年1月)。 白村江の戦い後は、国土防衛の政策の一環として水城や烽火・防人を設置した。又、冠位もそれまでの十九階から二十六階に制度改革などを行なっている。また、670年には我が国最古の全国制戸籍「庚午年籍」を作成させている。
中臣(藤原)鎌足	大化の改新	645年、中大兄皇子・石川麻呂らと協力して飛鳥板蓋宮にて、当時政権を握っていた蘇我入麿を暗殺、入麿の父の蘇我蝦夷を自殺に追いやった(乙巳の変)。この功績から、内臣(うちのおみ)に任じられ、軍事指揮権を握った。 最終的に天智天皇から「大織冠」ともいふ「藤原」姓を賜る。つまり、生きていたころの彼を指す場合は「中臣鎌足」を用い、「藤原氏の祖」として彼を指す場合には「藤原鎌足」を用いる。
孝徳天皇	大化の改新	第36代天皇(在位645年7月－654年11月)。皇極天皇の同母弟。645年の乙巳の変の後、推されて天皇となる。孝徳天皇は難波長柄豊碕宮を造営し、そこを都と定めた。が、自推4年(653)に、皇太子(中大兄皇子)は天皇に飛鳥に遷ることを求めた。天皇がこれを退けると、皇太子は皇祖母尊(皇極)と間人皇后、皇弟(大海人皇子)を連れて飛鳥に赴く。臣下の大半が皇太子に随って去ったので、天皇は氣を落し、翌年病氣になって亡くなった。
有間皇子	大化の改新	孝徳天皇の皇子。658年11月9日、中大兄皇子らにより謀反計画が発見。尋問にかけられ、「全ては天と蘇我赤兄だけが知っている。私は何も知らぬ」と答えたが、11日に藤白坂で絞首刑に処せられた。
蘇我蝦夷	大化の改新	馬子の子。推古天皇没後、舒明天皇擁立に尽力。父・馬子の死後、蘇我氏に対する内外の風当たりが強くなる中で、皇族や諸豪族との融和を重視して、蘇我氏との血縁関係のない舒明天皇を即位させたという説もある。皇極4年(645)に天皇の御前で入麿が殺されると、一時は蝦夷の力に与する者が集まったが、翌日、入麿の屍を前に蝦夷は邸宅に火をかけた(「天皇記」・「国記」にもと自叙した)。
蘇我入麿	大化の改新	蝦夷の子。父の大臣・蘇我蝦夷の晩年の皇極元年(642)、皇極天皇の即位に伴い、父に代わって国政を掌理する。この頃、皇室の周辺に国政を天皇中心に改革しようとする気運が強まったとされ、入麿はこのような動きを抑え蘇我氏の縁の強い古人大兄皇子を天皇につけようとする。そのために邪魔になる聖徳太子の王子、山背大兄王ら上宮王家の人々を自殺に追い込んだ。しかし皇極4年(645)、古人大兄皇子の異母弟で、皇位継承のライバルだった中大兄皇子・中臣鎌足らのいわゆる乙巳の変のクーデターによって、飛鳥板蓋宮の大極殿において皇極天皇の御前で暗殺された。
天武天皇 (大海人皇子)	壬申の乱 飛鳥京の時代	660年代後半、都を近江宮へ移していた天智天皇は、同母弟の大海人皇子を皇太子(皇太弟)に立てていたが、天智10年(671)10月、天智の皇子である大友皇子を太政大臣につけて後継とする意思をみせ始めた。天智天皇が病に臥せると、大海人皇子は大友皇子を皇太子として推挙し、出家を申し出て吉野宮に下った。天智天皇が没すると、672年6月、大海人皇子は吉野を出て美濃に移り、7月近江朝廷を攻めて大友皇子を自殺に追い込み、同時に近江朝廷側に同担した旧来の大豪族勢力を一掃した。 第40代天皇(在位673年3月－686年10月)。即位後は「飛鳥浄御原令」の制定を命じ律令国家の確立を目指す。天武13年(684)、「八色の姓」を制定して朝廷の身分秩序を確立し、新冠位制を施行した。また、天武天皇は皇親政治を徹底するためにその治世中、大臣を1人も置かなかった。
大友皇子	壬申の乱	天智天皇は実弟・大海人皇子を皇太子に任じていたが、我が子が可愛さの余り、弟との約束を破って大友皇子を皇太子と定めたことと記されている。しかし漢詩集『倭風藻』や『万葉集』には「父・天智が大友皇子を立太子(正式な皇太子と定めること)して立てた」とあり、これを支持する学説もある。 壬申の乱によりその治世は短く、明治3年(1870)に弘文天皇の諡号を贈られるまで歴代天皇として数えられなかった。現在では、正式には即位していなかったものの倭姫王(天智天皇の皇后)を立てて、皇太子として称制していたのではないかとの説もある。
大伴吹負 (おおもとのふけい)	壬申の乱	壬申の乱で大海人皇子側に立って兵を挙げ、飛鳥の倭京の本宮(飛鳥寺の西の標のもと)に集結中の敵軍を兼ね取って、倭(大和)の方面の将軍になった。及染山で敗れたが、葦池と中つ道で連勝し、最終的に大和を制圧して難波に進出した。
大分稚臣 (おおきたのわかおみ)	壬申の乱	大分氏は豊後国大分郡の豪族。大津皇子の舎人。壬申の乱で大海人皇子(天武天皇)の軍に加わり、7月22日の瀬田の戦いで、朝廷軍が瀬田の大橋に仕掛けた罠を見破り先頭立って橋を突破し、味方を勝利に導いた。
村国男依 (むらくにのおより)	壬申の乱	村国氏は美濃国各務郡の豪族。壬申の乱で大海人皇子に属して戦い、近江方面の諸将の筆頭として連戦連勝し、最大の功を立てた。
持統天皇 (鴨野讃良皇女)	飛鳥京の時代 藤原京の時代	第41代天皇(686年10月－称制、在位690年2月－697年8月文武に譲位)。天智天皇の娘、天武天皇の妃となり、草壁皇子をもうける。天武の後継として草壁を推していたが、草壁は27歳で早世。草壁の子・軽皇子(のちの文武天皇)の成長を待つために即位したと思われる。 689年、「飛鳥浄御原令」を施行。翌年「庚寅年籍」を作成し、692年にはその戸籍に基づいて口分田の班給が畿内で開催された。 694年には、かねてから造営していた藤原宮に遷都した。697年、草壁皇子の追従、軽皇子を15歳で立太子させた。同年譲位し、自らは天皇を後見した。初めて、譲位後に太上天皇を名乗った。
高市皇子	飛鳥京の時代	天武天皇の皇子(長男)。672年の壬申の乱では若年(18才)であったが大海人皇子軍の全権を委われ、乱に勝利した。686年に持統天皇が即位すると、太政大臣になり、以後は天皇・皇太子を除く皇族・臣下の最高位となり、持統政権を支えた。長男は長屋王。
草壁皇子	飛鳥京の時代	天武天皇と皇后鴨野讃良皇女(後の持統天皇)の子。妃は阿倍(あへ)皇女(後の元明天皇)。文武天皇の父。壬申の乱が勃発すると、大津皇子ら、他の兄弟達と共に両親に同伴する。天武8年(679)には吉野の盟約で事実上の後継者となり、天武10年2月に立太子。しかし皇位に就くことなく持統3年(689)4月13日薨去。
大津皇子	飛鳥京の時代	天武天皇皇子。母は天智天皇皇女の太田皇女(鴨野讃良皇女の実姉)。同母姉に大来皇女。皇太子ともなり得た天皇になる資格と素質を備えながらも、皇太子・草壁皇子への謀反の疑いから死を賜った。
藤原不比等	藤原京の時代	藤原鎌足の次男。文武2年(698)には、不比等の子孫のみが藤原姓を名乗り、太政官の官職に就くことができるとされた。不比等以外の鎌足の子は、鎌足の元の姓である中臣姓とされ、神祇官として祭祀のみを担当すること明確に分けられた。このため、不比等が藤原氏の実質的な家祖と解することもできる。 刑部親王・栗田真人・下宅野古麻呂らとともに大宝律令の編纂作業にあたり、大宝元年(701)8月に完成した。
文武天皇	藤原京の時代	第42代天皇(在位697年9月－707年7月)。父草壁が689年に亡くなり、696年には伯父にあたる高市皇子も薨じたため、697年2月立太子。同年8月、祖母・持統天皇に譲位され即位した。当時15歳という若さであったため、持統が上皇として後見役についた。大宝元年(701)に「大宝律令」が完成し、翌年公布している。また混乱していた冠位制を改め、新たに官位制を設けた。
元明天皇	藤原京の時代	第43代天皇・女帝(在位707年8月-715年10月)。夫・草壁皇子。息子・文武天皇。707年4月に孫・首(おびと)皇子(後の聖武天皇)の中継ぎとして初めて皇后を冠ないで即位した。708年に訖羅国扶父(黒谷)より和朗が輸入された。和朗に改元、和司間考を請進。大宝律令(701年)の整備・運用していく時代で実務に長けていた藤原不比等を重用。710年、藤原京より平城京に遷都した。

刑部(おさかべ)親王	藤原京の時代	天武天皇の皇子。「忍壁皇子」止も表記される。高松塚古墳の被葬者との説もある。 藤原不比等・栗田真人・下毛野古麻呂らとともに大宝律令の編纂作業にあたり、大宝元年(701)8月に完成した。
柿本人麻呂	藤原京の時代 漢字と万葉仮名	飛鳥時代の歌人。三十六歌仙の一人。後世、山部赤人とともに歌聖と呼ばれ、称えられている。 人麻呂の歌は、讃歌と挽歌、そして恋歌に特徴がある。賛歌・挽歌については、「大君は 神にしませば 神なから 神さびせず」と「高照らす 日の皇子」のような天皇即神の表現などをもって高らかに賛美、事績を表現する。 『愛国百人一首』(昭和17年発表)には「大君は神にしませば天雲の雷の上に座(いぼり)せるかも 止いう天皇を称えた歌が4首」されている。
蘇我稻目	カミの崇拝、崇仏論争	仏教公伝(538年)当時の大臣。仏教崇拝推進派(崇仏派)の中心人物。
聖明王 〔百済〕	カミ崇拝、崇仏論争	聖王(せいおう、生年不詳－554年)百済の第26代の王(在位:523年－554年)。新羅への対抗のために殊更に僧(ヤマト王権)との連携を図った。聖王の時代に倭国に仏教を公伝。その記事は、使者を送り、金銅の仏像一体、幡、經典などを伝えた(『日本書紀』538年宣化天皇)。
欽明天皇	カミの崇拝、崇仏論争	第29代天皇(在位540年1月－571年4月)。欽明13年(562)に百済聖明王から仏像と經典が伝えられたという。 『上宮聖德法王帝説』や『元興寺伽藍縁起』には「戊午年」に伝来とあり、仏教公伝は538年とするのが有力説となっている。
敏達天皇	カミの崇拝、崇仏論争	第30代天皇(在位572年4月－585年9月)。 当初崇仏派を支持していたが、疫病がはやり排仏へと方針を転換。蘇我馬子と物部守屋が対立している中で病没。
用明天皇	カミの崇拝、崇仏論争	第31代天皇(在位585年10月－587年5月)。敏達天皇の異母弟。聖德太子の父。敏達のあと天皇となるが、2年後に病没。
物部尾輿	カミの崇拝、崇仏論争	仏教公伝(538年)当時の大連。仏教受容反対派(排仏派)の中心人物。
物部守屋	カミの崇拝、崇仏論争	尾輿の子。蘇我氏の崇仏運動に反対し、疫病流行を理由に排仏を主張。蘇我馬子との争いに敗れ、滅ぼされる。
司馬達等	カミの崇拝、崇仏論争	達等自身は仏教創成期のこの蘇我馬子に協力して仏教興隆に尽力している。その子の嶋は敏達13年(584)、年11で出家して善信尼と称した。我が国初の尼僧である。同時に出家した渡来系氏族の娘二人と一緒に、4年後には百済に戒(け)を学ぶため二年間留学している。
鞍作鳥(止利仏師)	仏教興隆策	司馬達等の孫。飛鳥寺の釈迦如来像(飛鳥大仏)や法隆寺釈迦三尊像を造立。 推古13年(605)に丈六の仏像を造立。翌年、飛鳥寺金堂に設置しようとしたが、金堂の入口よりも背が高く入らないことが発覚。しかし、彼は入口を壊すことなく仏像を室内に安置したとの逸話が残っている。
三輪逆 (みわのさかう)	崇仏論争	飛鳥時代の豪族。敏達天皇の寵臣。逆は物部守屋、中臣磐余と共に廃仏派。しかし、敏達天皇崩御後の殯言で、穴穗部皇子は炊屋姫(敏達天皇の皇后)を犯さんと押し入ろうとした時、逆は兵衛を集めて宮門を閉じて侵入を拒んだため、穴穗部皇子と物部守屋に誅殺された。
道昭	古墳の終末	飛鳥時代(629年－700年)の僧。653年遣唐使の一員として入唐し、玄奘に師事して法相数学を学ぶ。法興寺(別名飛鳥寺・元興寺)の一隅に禪院を建立して住み、日本で初めて火葬に付された。弟子に行基。
玄奘三蔵 〔唐〕	古墳の終末	唐の僧(602年－664年)。629年国禁を犯して出国し、天竺(現在のインド)ナールンダ寺で戒賢より唯識を学び、各地の仏跡を巡拝した後、天山南路を経て帰国。膨大な經典を長安に持ち帰った。遣唐使の一員として入唐した道昭がその教父を受けた。
定恵(藤原真人)	古墳の終末	藤原鎌足の長男。不比等の兄。非常に優秀で僧として11才で遣唐使と共に長安へ渡り、神泰の弟子となる。神泰は当時、三蔵法師が持ち帰った教典の翻訳作業中で、仏教の最新の成果を学んだ。12年後帰国したが、3ヵ月後の665年12月大原(明日香村小原)で亡くなった。
行基	古墳の終末	奈良時代の僧(668年－749年)。師は道昭。百済系渡来氏族の末裔。法相宗などの数学を学び、集団を形成して貧民救済・治水・架橋などの社会事業活動。弾圧を受けたが、その後、東大寺大仏造立にも関わり、聖武天皇の命により東大寺大仏開眼供養の導師を勤めた。
南淵請安	陰陽五行と古代思想	推古16年(608)、遣隋使小野妹子に従い高向玄理、僧旻ら8人の留学生、留学僧の一人として隋へ留学する。32年間、隋の滅亡(618年)から唐の建国の過程を見聞して、舒明12年(640)に高向玄理とともに帰国。隋・唐の進んだ学問知識を日本に伝えた。 中大兄皇子と中臣鎌子は請安の塾に通うことから蘇我氏打倒の計画を練ったと伝えられる。請安が伝えた知識が大化の改新に与えた影響は大きいが、彼自身は新政府に加わっておらず、これ以前に死去したと思われる。 明日香村稲淵に「南淵請安先生の墓」がある。「稲淵」の地名は「南淵」が訛ったものと思われる。
皇極天皇 (斉明天皇)	陰陽五行と古代思想	第35代天皇(在位642年2月－645年7月)。舒明天皇の妃。舒明天皇の死後に即位。645年に子の中大兄皇子が蘇我蝦夷・入鹿親子を滅ぼす(乙巳の変・大化の改新)と、皇極天皇は同母弟の輕皇子(後の孝德天皇)に皇位を譲った(史上初の譲位)。 第37代天皇(在位655年2月－661年8月)。孝德天皇の死後、655年に再び皇位に就いた(史上初の重祚)。政治の実権は皇太子の中大兄皇子が執った。しばしば工事を起こすことを好んだため、労役の重さを見た人々が叛乱したという。660年に百済が唐と新羅によって滅ぼされると、百済を援けるため、難波に運って武器と船船を作らせ、更に瀬戸内海を西に渡り、筑紫の朝倉宮に居て戦争に備えた。しかし翌年、遠征の軍が発する前に亡くなった。 「亀形石造物」は斉明期に作られた。当時、留学から帰国した僧旻(みん)が伝えた易学が流行していた可能性が高く、それに関連した何らかの祭祀に使用したと想像される。
高向玄理	陰陽五行と古代思想	高向氏は魏の曹操の末裔を称する渡来人の子孫。608年、遣隋使小野妹子に従い留学生として隋へ留学し、640年に南淵請安とともに帰国する。645年の大化の改新後、僧の旻とともに新政府の国博士に任じられる。
旻(みん)(日文) 〔百済〕	陰陽五行と古代思想	飛鳥時代の学僧で百済からの渡来人。本名は日文。推古16年(608)遣隋使小野妹子に従い高向玄理・南淵請安とともに隋へ渡り、24年間隋で仏教のほか易学を学び、舒明4年(632)8月日本に帰国。その後、蘇我入鹿・藤原鎌足らに「周易」を講じた。 大化の改新のあと、大化元年(645)に高向玄理とともに国博士に任じられ、大化5年(649)高向玄理と八省百官の制を立案している。翌大化6年に白戸国司から白い雉が献上されると、その祥瑞を説明して「白雉止改元」された。
觀勒 〔百済〕	陰陽五行と古代思想 大陸の先進技術	7世紀初頭の百済の僧侶。日本へ602年に来航する。三論宗の法匠であり、成実宗にも通じていたという。推古10年(602年)に渡来。天文、暦本、陰陽道を伝える。暦本は604年に聖德太子によって採用された(ただし正式な暦法の採用は持統朝である)
恵慈(慧慈) 〔高句麗〕	仏教興隆策 大陸の先進技術	推古3年(595)、高句麗から渡来した僧。飛鳥寺に招かれる。聖德太子の仏教の師。
曇徴(どんちょう) 〔高句麗〕	漢字と万葉仮名	7世紀に高句麗から渡来した僧。推古天皇18年(610)高句麗王から貢上されて僧法定(ぼんじょう)とともに日本へ来朝した。五經に詳しく、彩色(現在の絵具)や紙墨を作り、また碾磑(みすうす＝水力を利用した臼。紙の原料となる麻クズの繊維を細かく砕くために用いたと考えられている。見送ったという。
稗田阿礼	漢字と万葉仮名	稗田阿礼という人物については、「古事記」の編纂者の一人という以外にはほとんど何かわかっていない。同時代に編まれた『日本書紀』でもこの時代の事を記した『続日本紀』でも名前前は出てこない。『古事記』の序文によれば、天武天皇に舎人として仕えていた。一度目や耳にしたことは決して忘れなかったのも、その記憶力の良さを見込まれて『帝紀』『旧辞』等の諸習を命ぜられた。そのとき28歳であったと記されている。元明天皇の代、詔により太安万侶が阿礼の諸する所を筆録し、『古事記』を編んだ。
太安万侶	通史 漢字と万葉仮名	太安万侶(生年不詳－723年8月15日)は、奈良時代の文官。従四位下・民部卿。711年(和珥4年)、元明天皇に稗田阿礼の諸習する『帝紀』『旧辞』を筆録して史書編纂を命じられ、翌712年(和珥5年)『古事記』編纂上。1979年(昭和54年)1月23日奈良市此井町の茶屋敷で太安万侶の墓が発見。火葬された骨や真珠が納められた木櫃と共に墓誌が出土。